

ブラジル ルセーフ大統領弾劾の今後

木村 元

なぜ弾劾裁判が始まったか ―ペトロブラス汚職事件

事の起こりは、2014年3月のガソリンスタンド網を使った資金洗浄疑惑捜査である。これに端を発したペトロブラスを舞台とするブラジル史上最大の汚職事件がルセーフ大統領弾劾手続き開始の引き金である。これは、同社幹部が受注企業から得た賄賂を政財界等に広く配布し、与党PT（労働者党）も政権維持のために利用したとされているもので、2015年末までに計139名の経済人・元閣僚・議員等が逮捕され、今も約50名の現職・元議員の捜査が継続中である。この汚職事件に対して国民の怒りは爆発し、今年3月には約300万人の大規模な抗議デモがブラジル全国で発生するに至った。この汚職事件により政府の信頼は一気に失墜し、ルセーフ大統領弾劾へと向かっていった。ただし、ルセーフ大統領自身には捜査の手は及んでいない。正式な弾劾理由は、不正会計処理と、黒字目標の達成が不可能と知りながら国会の承認なく支出を許可したのではという財政責任法上の責任であり、国民が弾劾を要求した直接の原因とは異なっている。「不正会計処理」とは、財政責任法に基づいて設定した基礎的財政収支の黒字目標を達成するために一部の支出を翌年度に回し、一方で政府系金融機関から国民に給付したので、これが財政責任法の禁止する政府系金融機関からの借入れに当たるといものである。

何はともあれ、4月17日、下院は弾劾裁判所設置を

上院に推挙することを決定し、5月12日、上院は弾劾裁判所の設置手続開始を決定した。これにより、ルセーフ大統領は最大180日間の限度で停職し、テメル副大統領が大統領代行に就任して、テメル暫定政権が成立した。今後は、180日以内に弾劾裁判所が大統領を罷免するか否かを決定する。現時点では、この決定は8月から9月ではないかと予想されている。

戦後最大の不況

ところで、今回の弾劾の直接の原因は上記の通りペトロブラス汚職事件であるが、弾劾の原因はどれもそれだけではないようである。根本的には、ルセーフ政権が政財界を含む国民の信頼を失ったということであるが、信頼失墜の原因には戦後最大の不況が大きく後押ししている。ブラジルは折からの資源ブームに乗り、2011年にはイギリスを抜いてGDP世界第6位に躍り出るなど飛ぶ鳥を落とす勢いであったが、その後の資源ブームの終演により真逆さまに転落した。資源ブームと軌を一にして、南米では左派ポピュリズムが広がり、ばらまき政策を推進したが、ブラジルもそのうちの一つであり、03年に就任したルーラ大統領とその後を継いだルセーフ大統領の4期13年半にわたりばらまきを続けてきた。確かに、この結果、貧困層が引き上げられ、中間層が4,000万人も拡大して、ブラジル経済は包摂的成長を遂げたという積極的側面もあったが、ばらまき政策がいつまでも続く訳がない。経済政策の誤りによって現下の大不況を招いたのであるから、その責任をとれという論理であるとみられる。

ルセーフ大統領の言い分

ただし、現在のブラジルの不況は世界的な現象の一環であり、まんざらルセーフ政権だけの責任ではない。この意味では、自らの責任だけではないことの詰め腹を切らされる羽目になっている。これも最高責任者としての立場から致し方ないことなのかもしれないが、同情の余地はある。もっとも、汚職事件同様、これも正式な弾劾理由にはなっていない。自らに汚職の嫌疑



汚職事件に抗議する3月13日の大規模デモ

—橋下毅氏撮影

はなく、弾劾理由とされている不正会計処理さえ、どの政権でもやっていることであり、弾劾理由にはならないと大統領本人は主張している。同大統領は、今回の弾劾は、選挙で正当に選ばれた大統領を理由もなく引きずり下ろそうとしているクーデターであると述べているが、クーデターではないとしても、かつ、弾劾裁判そのものが100%司法的手続きではないということとを割り引いたとしても、本当に今回の弾劾理由が弾劾の対象となる背任罪に当たるのかという点については議論の余地もある。ホフマン上院議員も、「不正会計処理で大統領を弾劾するのは、交通事故で死刑にするようなものだ」と述べている。

ここで思い出されるのは、ルーラ前大統領のマリーザ夫人が初めて首都ブラジリアへ行ったときルーラ氏に述べた言葉である。同夫人は、その華やかさに圧倒されて、「あきらめた方が良いわよ。あの人たちは絶対この富を手放しはしないわよ。」と言ったそうである。今回の弾劾劇は、PTに危機感を持ったエスタブリッシュメントが、国民の反汚職の波に乗って推進したPT下ろしと見ることもできる。ブラジルのマスコミはエスタブリッシュメントであり、左派PTとは一度もそりが合った試しがない。考えてみれば、マスコミも経済界も初めから弾劾推進派であり、あたかも弾劾に向けて世論を誘導しているかのようであった。今回の弾劾劇が一気に進んだのは、テメル副大統領率いるPMDB（ブラジル民主運動党）が連立を離れて弾劾推進に回ったからである。世論がPMDBをさながらブラジルの救世主であるかのように扱っているのは、エスタブリッシュメントが、何が何でもPTを引きずり下ろしたいと思っていることの現れと見ることもできる。

南米のポピュリズムの終演

ただし、少し大きな流れで見れば、今回ルセーフ大統領が罷免されるとすれば、それは南米の大きな政治の流れであり、左派ポピュリズムの終演の一環とも言える。2014年の大統領選挙でのルセーフ大統領の僅差の勝利は今回の弾劾劇の前兆であり、弾劾が成立して正式に政権交代が起こるとすれば、それは起こるべくして起こった政権交代と言える。

今後の政局

さて、今後弾劾裁判がどうなるかについて、大方の見方は、弾劾が成立するというものである。6月3日

時点でのエスタード・デ・サンパウロ紙の上院議員に対する調査によれば、賛成43、反対20である。弾劾成立には2/3である54票の賛成が必要である。

大方の予想にしたがって、弾劾が成立するとし、テメル暫定政権が本格政権になるとすると、今後ブラジルはどうなるであろうか。ここで思い出されるのは、1992年のコロール大統領の弾劾である。コロール大統領の後を継いだのはイタマル・フランコ副大統領である。この政治家はなかなかの人物で、リオデジャネイロのカーニバルで、ここではちょっと書けないような格好をしたモデルを従えてパレードを見ていたということでスキャンダルになる等、型破りなところのある人ではあったが、全国的には無名の政治家であった。したがって、当時弾劾が成立したときには誰もフランコ大統領に期待していなかったが、あにはからんや、レアル・プランを成功させてハイパーインフレを収束させ、その後のブラジルの経済発展の基礎を築いたのだから驚きである。こうした前例があることも考えると、テメル政権も期待が持てる。そもそも、テメル副大統領は2018年の大統領選挙には出ないと公言しているから、怖いものなしである。いくらでも思い切った政策を打てる。しかも、弾劾が成立したならば、テメル副大統領は議会の圧倒的多数の支持を得て大統領として発進するということである。議会の最大勢力であるPMDBと、最大野党であり、かつ人材の宝庫とされるPSDB（ブラジル社会民主党）が大連立し、中道右派勢力を結集して成立する政権である。テメル副大統領の国民からの支持率は低いが、政権を交替して、何とかこの国を立て直さなければならないという意識が国民にも国会にも存在する。言ってみれば、テメル政権は成功のためのすべての条件をそろえて船出するのである。少なくとも、ブラジルが政治経済的に回復し、再び飛躍するための基礎固めはしてくれると思う。暫定政権のメイレス新財務大臣は、年金制度、労働及び歳出額の上限設定といった改革を優先事項とする旨述べ、重要なポイントは投資の減少である旨述べた。また、経済の回復は予想より早くなるであろうと述べており、セーハ新外務大臣も、17年には経済は回復し、2%成長を達成すると述べている。マスコミにも、経済はまもなく底を打つとの論調が出てきている。

おわりに

1980年代、ブラジル人が、「ブラジルはもうだめだ」とか、「ブラジルに未来はない」等と言っていたことを

思い出す。確かに、年率 3,000% に迫ったことさえあるハイパーインフレに世界最大の対外債務を抱えて青息吐息であったブラジルであったから、そう言われても仕方がなかった。それが、その後 GDP 世界第 6 位の大国に成長したのである。たとえそれがバブルであったとしても、あの頃を知っている人にとっては、10 年、20 年の間には何が起るかわからないものだと思う。ましてや、資源大国のブラジルである。食料輸出は世界一。多少近代化を怠ったとは言え、飛行機まで作る総合的な経済を持つ国である。2 億人の市場を抱えるこの国は、経済政策さえ正鵠を射れば、また力強く成長する力を十分に持っている。しかも、今回の弾劾劇の過程ではっきり言えることは、弾劾のプロセスすべてが憲法の規定に基づいて粛々と行われていることである。民主主義の制度が根付いているということである。以前、破綻していたリオデジャネイロ州の財政をあっという間に立て直したレヴィー財務長官に、一体どうやって財政再建を成し遂げたのかと聞いたことがある。同長官は、当たり前な財政運営に戻しただけだと答えた。この人は、昨年末辞任したルセーフ政権の財務大臣であったが、テメル政権が当たり前な財政を回復すれば、ブラジルの再建はそれほど難しいものではないかもしれない。少なくとも、経済状態はコロール大統領弾劾の時と比べれば、ずっとましなのであるから。

(本稿の内容は筆者個人のものであり、所属する組織の見解を反映ないし代表するものではない。)

(きむら はじめ 外務省中南米局南米課地域調整官)



ブラジリアの国会議事堂—提供 あすてるトラベル